

Ⅲ 調査結果のまとめ（令和６年度）

1 総合的にみた結果

- ・ 小学校及び中学校においては、全国平均を下回っている項目が多い。
- ・ 高等学校になると、全国平均を上回る項目が男女ともに６割以上に増加する。

- 総合判定結果（Ａ～Ｅの５段階）では、男女とも年齢が進むにつれてＡ判定の児童生徒が増える傾向にある。
- Ｅ判定について、校種別に比較すると、男女とも全日制高等学校が最も低い値である。また、学年が進むにつれて、Ｅ判定の児童生徒が減少する傾向にある。
- 定時制高等学校では、他の校種と比較すると男女ともＡ判定の生徒が少なく、Ｄ・Ｅ判定の割合が高い。

2 全国平均との比較

「体力・運動能力調査」（６歳～７９歳）における比較

全国平均と同様か上回る項目の割合

小学校（全学年）	約１８％（１７項目／全９６項目）
中学校（全学年）	約１５％（ ８項目／全５４項目）
高校・全日（全学年）	約８７％（４７項目／全５４項目）
高校・定時（全学年）	約３６％（２４項目／全６７項目）

- ・ 「体力・運動能力調査」（６歳～７９歳）との比較では、全国平均と同様か上回っている項目の割合が、全日制高等学校では約８７％、定時制高等学校では約３６％、中学校では約１５％、小学校では約１８％となった。
- 小学校及び全日制高等学校は全国平均と同様か上回っている項目の割合が昨年度より増えた。
- 小・中学校及び高等学校の男女ともに、「長座体前屈」で全国平均と同様か上回る学年が多く見られた。
- 小学校女子、全日制高等学校男女の「ボール投げ」で全国平均と同様か上回る学年が多く見られた。
- 全日制高等学校の男女とも、「上体起こし」「長座体前屈」「反復横跳び」「５０ｍ走」「２０ｍシャトルラン」「立ち幅跳び」「ボール投げ」で全国平均と同様か上回った。
- 小・中学校の男女とも、「握力」「反復横とび」「２０ｍシャトルラン」「５０ｍ走」「立ち幅とび」において、すべての学年で全国平均を下回った。

【参考】「令和６年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（小５・中２）

体力テスト合計点平均の全国順位

小５（男子）	３２位	小５（女子）	２４位
中２（男子）	１７位	中２（女子）	１７位

3 校種別にみた結果

＜小学校＞

- 男女とも「長座体前屈」において、多くの学年で全国平均と同様か上回った。
- 女子では、「ボール投げ」において、多くの学年で全国平均と同様か上回った。
- 昨年度と比較すると、男女とも「上体起こし」と「反復横とび」の記録が向上した。
- 「握力」「反復横とび」「20mシャトルラン」「50m走」「立ち幅とび」が、男女すべての学年で全国平均を下回った。
- 小1の男子及び小5の女子は、全ての種目において全国平均を下回った。

＜中学校＞

- 女子は「長座体前屈」において、全ての学年で全国平均と同様または上回った。
- 昨年度と比較すると、男女とも全ての学年において「50m走」と「立ち幅とび」の記録が向上した。
- 総合判定では、男子において学年が進むにつれて、A・Bの判定が増え、D・Eの判定が減少する傾向にある。
- 男女とも「握力」「上体起こし」「20mシャトルラン」「持久走」「50m走」「立ち幅とび」について、全国平均を下回った。
- 昨年度と比較すると、男女ともに「上体起こし」と「ボール投げ」の値が低下した。

＜高等学校（全日制）＞

- 男女とも、「上体起こし」「長座体前屈」「反復横とび」「20mシャトルラン」「50m走」「立ち幅とび」「ボール投げ」において、全国平均と同様か高い値を示した。
- 男女とも「長座体前屈」「反復横とび」「ボール投げ」が、全国平均と比較して特に高い値を示した。
- 総合判定では、男子において学年が進むにつれてA判定が多くなり、高3男子ではA判定の割合が約35.6%と全学年で最も高い値を示した。
- 男女とも「持久走」については全国平均を下回った。
- 「握力」について、男女とも全国平均に近い値であるが、年次推移を見ると、低下傾向を示した。

＜高等学校（定時制）＞

- 女子では、全ての学年において「握力」が全国平均と同様か上回った。
- 総合判定では、男女とも学年が進むにつれてE判定が多くなる傾向がある。
- 男女ともにD・E判定が占める割合が高く、他の校種と比べても多い。

4 本県の体力状況と指導の方向（考察）

（１）体育・保健体育以外の時間に運動する習慣を身に付ける

- ・令和６年度調査において令和５年度調査と比較すると、数値が増加した項目は１５３、減少した項目は１１８で若干の回復傾向がみられたと言える。コロナ禍前の水準には至っていないが、その背景として、コロナ禍における様々な活動制限が解除され、日常生活において運動をする機会が増えたためであると考えられる。
- ・令和６年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査によるとスクリーンタイム※^１は増加傾向が見られ１週間の総運動時間も全国平均と比較すると少ない。コロナ禍以降も続く生活習慣の変容が体力低下の一因になっていることが推察される。
- ・仲間と運動する楽しさを味わう体育・保健体育の授業を充実させ、「運動が好き」「体育が楽しい」という児童生徒を育み、体育・保健体育以外の時間も運動をする習慣を身に付けるようにしていくことが必要である。

（２）低学年において、一定の運動量を確保する

- ・小学校低学年では、多くの項目で全国平均を下回っており、その後、年齢を重ねるにつれて全国平均との差が小さくなることから、特に低学年においては学校などで一定の運動量を確保していくことが重要であると考えられる。
- ・小学校低学年の体育の授業において、運動の楽しさや喜びを味わいながら、体を動かすことができる運動遊びなどの活動を充実させ、授業での運動時間を増やすとともに、児童の業間や休み時間における自発的な運動への取組につなげていくなどの工夫が求められる。

（３）全身持久力の向上

- ・特に、小・中学校においては、「２０ｍシャトルラン又は持久走」において全国平均を大きく下回る傾向が見られることから、全身持久力を高めるための運動が求められる。
- ・児童生徒の実態に応じて、継続的な運動につながる取組を行うことで全身持久力の向上を促すよう留意する。

（４）体力向上の取組の充実

- ・全国平均を上回る項目の割合は、高等学校になると増える傾向が続いていることから、幼児期や学童期において、体育の授業における運動遊びや体育の授業以外でも体力向上に関わる取組みを充実させることが必要である。
- ・園児及び児童生徒の体力向上や運動習慣の定着を図るには、園や学校の資源を一体的にマネジメントし、生活の中で様々な運動機会の確保を図ったり、多様な動きを経験できるような指導の充実を図ったりすることが必要である。

※１：平日１日当たりのテレビ、スマートフォン、ゲーム機などによる映像の視聴時間

IV 今後の取組

児童生徒が進んで運動に親しむことができる環境の整備や、教職員が体育・保健体育の授業改善を図ることで、運動できる場や運動する時間を確保し、「運動が好き」「体育が楽しい」と感じる児童生徒を増やし、運動習慣の定着を図る。

1 授業における取組

- ・個に応じた指導の充実を図るために、運動が苦手と感じる児童生徒に対する手立てとともに、運動を得意とする児童生徒の運動機会の充実を図り、体育・保健体育の授業における効果的なICTの活用方法などを研修や講習会で広めることによって、「運動が好き」「体育が楽しい」と感じる児童生徒を増やす。
- ・体育・保健体育の体づくり運動や各領域の準備運動などにおいて、仲間と手軽に楽しみながら取り組むことができるアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）^{*1}等の運動遊びを積極的に導入し、授業でねらう技能の獲得につなげたり、学校生活の中で児童生徒自ら運動に親しむ資質・能力を育んだりする。

2 授業外における取組

（1）チャレンジスポーツ in ぎふ^{*2}

- ・体育・保健体育の授業以外においても運動時間を確保するために、仲間と一緒に大縄跳びやボール運動に取り組んだり、目標をもって運動に取り組んだりすることができる「チャレンジスポーツ in ぎふ」を多くの児童生徒が活用できるようにすることで運動を習慣化させ、体力向上を図る。

（2）ぎふっこダンスフェスティバル^{*3}

- ・児童生徒がダンスを創作して踊るという活動を通して、仲間と作品を創り上げる楽しさや運動の楽しさを味わうことで、運動に親しむ資質・能力を育む。

3 教職員への周知及び研修

- ・各地区で体育担当教員や体育主任などを対象にした講習会や研修会を実施し、児童生徒の体力の状況及び分析等を周知するとともに、自校の実態を正確に把握し課題を明確にした上で、体育・保健体育の具体的な授業改善や運動時間を確保するための方策を立て、体力向上を推進する。
- ・運動遊びを先進的に実践している教職員等を講師に、積極的に運動遊びを取り入れた授業を学ぶことのできる講習会を実施する。
- ・「チャレンジスポーツ in ぎふ」や「ぎふっこダンスフェスティバル」を活用した体力向上の取組について、具体例を講習会等において紹介する。

*1：アクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）

- ・子どもたちが楽しみながら積極的にからだを動かせるプログラムで、日本スポーツ協会が、子どもたちが発達段階に応じて身に付けておくことが望ましい動きを習得する運動プログラムとして開発し、主に4つのテーマについて、実際の指導現場への普及を図っているもの。

＊２：チャレンジスポーツ i n ぎふ

- ・ 8の字跳びやチームジャンプ、ボールパスリレーなどの運動に、学級や学年又は学年の異なる集団で取り組み、記録をW e b上で競い合う。それらの運動を通して、仲間と運動することの楽しさや記録向上の喜びを味わわせ、主体的に運動に親しむ習慣を培い、児童生徒の体力の向上を図る。
- ・ 令和元年度から新しい種目として新体力テストの9種目を設定。児童生徒が自己の体力の向上に向け改めて各種目に取り組んだり、課題とした種目をもう一度計測し、学級の平均記録の差を競うことで運動に対する興味関心を養い体力の向上を図る。

＊３：ぎふっこダンスフェスティバル

- ・ 同じ学校の2名以上の児童生徒が、指定された楽曲の中から踊りたい曲を選択し、オリジナルダンスを創ってエントリーしたり、またエントリーされた仲間の作品を見たりしてダンスの楽しさに触れる。エントリーされた作品は、体育健康課のY o u T u b eチャンネルに掲載され、全ての作品に、専門家によるコメントが掲載される。
仲間と作品を創り上げる楽しさや運動の楽しさを味わうとともに、日常における運動習慣を身に付け、体力向上を図る

参 考

〈テスト項目と体力評価〉

テスト項目	体力評価	テスト項目	体力評価
握力	筋力	シャトルラン又は持久走	全身持久力
上体起こし	筋力・筋持久力	50m走	スピード・走能力
長座体前屈	柔軟性	立ち幅とび	筋パワー
反復横とび	敏捷性	ボール投げ	筋パワー・投能力・巧緻性

〈標準偏差（SD）〉

標準偏差とは、平均値を基準にして、集団の散らばり具合を示す度合いである。標準偏差が大きい場合は、その集団の散らばりが大きく異質集団であるといえる。その反対に標準偏差が小さい場合は、集団の散らばりが小さく等質集団であるといえる。

〈Tスコア〉

個人の記録を比較し、集団の中で相対的な位置を知ろうとする場合、異種目の比較や同一種目であっても異単位な場合の比較が可能な方法が必要である。その代表的な方法がTスコアである。Tスコアは、集団の平均を50点とし、そこから標準偏差の1倍離れたものを40点と60点に、2倍離れたものを30点と70点に換算した数値である。